

第七章  
デジタル腹芸

「税務署と言えばこの新型コロナウイルスの感染拡大で税制がかなり変わりましたね」

「税務署が税法を作っているのではないのよ。取り扱いを変更しただけ。先ほどの確定申告の期限を新型コロナウイルスの感染が落ち着くまで延長するとか、不要不急の調査はしないとか……」

「税務調査はない方がいいが、それを逆手にとつて脱税する輩がいるだろうだから、新型コロナウイルズ感染拡大にかかわらず必要な調査はすべきじゃ」

「当然でしょ。警察に協力しないなどいつている場合じゃなく……警察もそうですが、取り締まりや捜査や調査に『不要不急』はないでしょ」

「それがそうでもないのじゃ」

山本がテレビの中で大きく首を傾げる。

『『不急』は分かんが『不要』な調査が結構多いのじゃ』

田中も同じように首を傾げる。

「わしはきちんと申告しておる。じゃが家賃収入が多いから必ず数年に一度税務調査を受ける。じゃが申告を修正せいと言われたことはない。もうけが少なからと言って一〇年も二〇年もごまかしていたらかなりの脱税額になる。他に調査すべきところはいくらでもあるはずじゃ」

「見る目がないというのか嗅覚がないと言うのか、脱税している人を見逃してしまう。AIに任せればいいのに」

## 第七章 デジタル腹芸

田中に山本が領きながら補足する。

「それなりの調査システムを構築しているようですが、昔の方が的中率は高かったらしいわ。銀行の融資も昔の方が貸し倒れが少なかったらしい」

「どういうこと？ 世の中はAI、AIとうるさいほど言っているけれど」

「AIは一定の枠内ではその能力を発揮できるけれど例外に弱いらしいの」

「学習機能が高いって聞いているけれど」

「ディープランニングでしょ」

「ちよと待ってくれ。AIとコンピュータは別物か」

大家が割り込んでくる。

「僕はパソコンには少し明るいですが、AI、つまり人工知能というのはよく知りません。それに見たこともない」

「じゃがデジタルに弱い政治家までもがAIと言っておる。デジタル化とも言っておるが、AIを活用しなければデジタル化はできないのか」

「本当にデジタル化と言う意味を知っている人は少ないと思います。デジタルとは単純です。ゼロの次は1でその間がありません。つまり『ゼロ』と『1』だけの世界。それにデジタル計算する道具は昔からあります」

「昔から？」

## 第七章 デジタル腹芸

「ソロバンがそうです」

「ソロバン……あつそうか。わしは今でもソロバンを使っておる」

「あれです。2であれば一気に玉を二つあげているように見えますが、一つ一つ上げているのです。しかも五つの玉で『ゼロ』から『9』までの数を表現する優れたものです」

「フーン。古い道具じゃがデジタル計算機なのか」

「そうです」

「するとアナログ計算機はもつと古くからあるのか？」

「それが……人間はもともとデジタル計算をしていました。実はアナログ計算は意外と複雑なのです」

「なに？ よくわからん」

田中が指を折って数える。

「ひとつ、一つと一つでふたつ、一つと一つと一つでみつつ……ほらデジタルでしょ」

もうひとつ大家は納得していない。

「アナログ計算機に計算尺という物がありますが、ソロバンよりかなり後でデビューしました」

「それじゃ、人間はデジタル計算を使いこなしていたと言うことになるのか」

「そうです」

大家がここで手を打つ。

「そうか。様々な技術革新があつてデジタル計算が高速化された」

「ピンポン。繰り返しますがアナログ計算は複雑なんです。たとえば円周率」

「3・14 っていうやつじゃない」

「3・14 で終わりじゃないのです」

「わかつとるわい。でも4の後は知らん」

「だいたいで良ければ3・14で十分ですが、製造業ではそうはいきません」

「複雑な製品を作るには確かにそうじゃない」

「いいえ。大昔でも正確な円周率は非常に重要でした。たとえば橋を架けるとか暦を作るとか距離を測るとか……」

テレビ画面には田中の説明を応援するかのようアーチ形の石橋や太陽・月・地球の位置を示す模式図とかが流れる。

「コンピュータがない頃は苦勞して円周率を求めました。コンピュータが発明されてからも結構計算に時間がかかりました」

「デジタル計算が得意のはずのコンピュータがか？」

「いいえ。先ほども言いましたがコンピュータは0と1だけを使って、つまり二進法で計算します。だから円周率のようなアナログ計算は意外と時間がかかるのです。でも人間は端折るところが得意なので3・14でも我慢できるのです。一方コンピュータは放っておけばいつまでも

円周率を計算します。端折るといような芸はできません」

「端折るとい計算技術はすごいのか」

「どこで端折るのかという判断は人間ならではですね」

「コンピュータには腹芸はできんのじゃな」

\*\*\*

「腹芸で思い出したが、新型コロナウイルス対策を巡って都知事と総理の腹芸対決は見るに堪えないのう」

「『国が決めたのだから心遣いを期待しています』と都知事が言えば総理は『強い危機感を持って知事と調整中です』とやり返す。どちらもすぐ対応策を示すことなく責任逃れに徹する。

これが世界三位のGDP国家の首相と一千万人以上の人口を誇る首都の知事のやりとりとは思えませんね」

大家が小膝を数回叩きながら元気よくしゃべり出す。

「それに比べれば大坂府知事は具体的な事例や数字を掲げて何度も市民にわかりやすい説明をするし国にもお願いを繰り返す。市民はもちろん全国の人々がそんな府知事の腰の低さに同情を寄せると、政府もむげに捨て置きなくなる。他県の知事も同調して援助を求めると政府も重い腰を上げざるを得なくなった。若いやり方は老獪じゃ。それに比べ府知事の母親よりも年上の都知事は逆に子供じゃ。大事なのは都民をいかにしてウイルス感染から守るかなのに、自

分の責任を放棄して国の責任ばかりを追求する。しかも都民にはダジャレに近い幼稚な言葉しか発しない」

「確かに、都民を守るのではなく自分の地位や立場にばかりこだわっていますね」

「要は責任をとりたくないのじゃ」

「でもこの困難を切り抜けければ英雄になれるビッグチャンスじゃないですか」

「歴史に名を残す、政治家にとってやりがいのある仕事のはずじゃ」

「府知事に総理大臣になって欲しいですね」

「なるほど。そのとおりじゃ。責任のなすり付け合いなど見苦しいだけじゃ」

「ここでテレビに電源が入ると山本が登場する。」

「ところで今は責任がなくても関わりがあれば問題視される時代です」

山本が画面から消えて座礁した大型貨物船の映像が現れる。燃料の重油が近くの島に到着して海岸が真っ黒になっている。

「これは日本の海運会社が運航する貨物船です。海運会社は上場する日本商社の依頼で貨物を日本に輸送する途中、アフリカのある島の近くで座礁したのです。当初日本政府は民間会社が起こした事故だとして沈黙していました。もちろん海運会社の社長は謝罪の記者会見を開きました。ところがその会見場に荷主の商社の副社長も同席して一緒に頭を深々と下げたのです」

田中がすぐさま疑問を呈する。

「荷主には責任がないのでは？」

「この事故で、海が汚染され動植物は壊滅的な被害を受けて、観光地の島の経済が立ちゆかなくなりそうです。確かに荷主の商社に責任はありません。だからといって傍観するわけにはいかないと会見に応じたのでしよう。むしろ積極的に島や海や生物の受けた被害をできるだけ少なくするよう対処すべきと商社の株主の後押しがあつたようです」

「法律上問題はないが道義上問題ありと判断したのじゃな？」

「グローバル化した世界は様々な関わり合いを持っています。平たく言えば『お互い様』です。ですから商社は積極的に救済援助を申し出たと言うだと思えます」

「その後、日本政府はどうしたのじゃ？」

「民間企業が起こした事件でも日本企業である限り日本政府は様々な形で関わりがあります。商社の対応を見て慌てて重い腰を上げました」

「総合的に俯瞰して判断するのが得意な首相なのに、なぜ対応が遅れたんだろ？」

「田中さんの言うとおりにじゃ。余りにも遠い場所での事故だったので得意の『俯瞰』ができなかったのじゃろう」

山本が画面に現れると苦笑いする。

「商社の株は上がったけれど、政府の株はがた落ち」

「いつも思うんだけど『こうすればいいのに』というのと反対のことばかりするのが政府とい

## 第七章 デジタル腹芸

うのか首相や大臣たち。どうしてなんだろう？」  
「なるほど」

## 第七章 デジタル腹芸